

平成21年 5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520203

研究課題名（和文）官吏ヴィオレール＝デュックと文学

研究課題名（英文）An Official Viollet-le-Duc and literature

研究代表者

岩根 久（IWANE HISASHI）

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50176559

研究成果の概要：

フランス本国においてすら等閑視されていた E.-L.-N. ヴィオレール＝デュック（1781-1857）の業績を再評価し、19世紀前半の文芸界において彼が隠れた影響力を持っていたことを実証した。特に1830年代後半から1840年代に亘る文芸誌記事に詳細な検討を加え、サント＝ブーヴがヴィオレール＝デュックの交流が希薄であったという従来の説を覆す決定的証拠を得たことは本研究の大きな成果である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	420,000	2,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学・文学史・文化史・書誌学・ヴィオレール＝デュック

1. 研究開始当初の背景

19世紀前半におけるルネサンス詩の再評価に関して、従来の説でクローズアップされているサント＝ブーヴの役割を再検討した結果、E.-L.-N. ヴィオレール＝デュックの存在が浮かび上がって来た。しかしながら、ヴィオレール＝デュックの業績についてはほとんど研究が行なわれていないのが実情である。報告者は本研究を開始する準備として、書誌についてはすでに着手している（岩根 久「E.-L.-N. ヴィオレール＝デュック著作目録註解」『言語文化研究』、大阪大学言語

文化部・大阪大学大学院言語文化研究科、26号、2000年、pp. 219-232. 参照）。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、19世紀前半に生きたひとりの官吏ヴィオレール＝デュック（Emmanuel Louis Ni-colas Viollet le Duc）が、経理担当の職務の傍ら手がけた文学上の諸業績を再評価し、19世紀フランス文学史を再構築することである。

(2)本研究がその対象とするヴィオレール＝

デュックという人物は、官吏としての公務の傍ら、当時世間から見捨てられていた書物をこつこつと収集し、それらを律儀に読みこなして、文学的な自己修練をひとつの楽しみに生活を送っていたようだが、彼のこうした「趣味」が趣味人のディレクタントイスムには終わらなかったのは特筆すべきである。彼が関与した文芸上の業績は、詩、小説、書誌、近代作家の作品の校訂・編纂、事典の執筆と多岐にわたっている。書誌学者、あるいは文学史家としての業績については予めから注目されている。

(3) ヴィオレール＝デュックの文学史における重要性を最初に指摘したのは、1940年のギュスタヴ・シャリエの論文「19世紀におけるサント＝ブーヴ以前のロンサール評価」(Charlier, Gustave, «Ronsard au XIXe siècle avant Sainte-Beuve», *Revue des cours et conférences*, XLI:I-No.6 (1940 fév.), 1940) であり、さらにそれを、クロード・フザンは1974年に提出された『プレイアド派の死と再生』という学位論文のなかの一節で詳細に論じている (Faisant, Claude, *Mort et resurrection de la Pléiade*, 1585-1828, (Thèse es Lettres, Paris IV, 1974), Paris: H. Champion, 1998.)。また、ミシェル・シモナンは彼の書誌学者としての業績に注目し、彼の文学史上の独自性と重要性を指摘した (Simonin, Claude, «Réflexions sur un catalogue d'amateur», *Romantisme*, XIV('84), 44, pp.19-26, 1984.)。

(4) ただし、文学史上の重要性は注目されながらも、彼自身についての研究は全く行われてこなかったといっても過言ではなく、これまで書誌さえ存在しなかった。2000年になってようやく報告者はフランス国立図書館に所蔵されている著作をもとに彼の書誌を完成させた (「E.-L.-N. ヴィオレール＝デュック著作目録註解」(『言語文化研究』, 大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科), 26号, 2000年, pp.219-232.)。同時期に彼の子孫にあたるジュヌヴィエーブ・ヴィオレール＝デュックが自らが所蔵する文書をもとに『ヴィオレール＝デュック、一族の歴史、資料と書簡』(Viollet-le-Duc, Genviève: *Les Viollet le Duc, Histoire d'une famille, Documents et correspondances*, Sommière (Gar): Editions Romains Pages/Genève: Slatkine, 2000.) を公刊し、今後の研究に貴重な資料を与えてくれている (ただし、これは本研究が対象とするヴィオレール＝デュックの息子にあたる有名な建築家・建築史家ヴィオレール＝デュックを中心に据えた資料である)。本研究は、これまで扱われてこなかったヴィオレール＝デュックの著作活動

を解明することを目的とするものである。

3. 研究の方法

ヴィオレール＝デュックの著作が出版された時間軸に沿って行なう。文学者の活動を把握するためには、全著作を総体的に捕らえた上で、個々の著作の分析を行わなければならないのはいうまでもないし、またそれを意識に留めた上で研究を遂行するのであるが、ヴィオレール＝デュックに関しては各時期のジャンルがある程度のまとまりを持っており、時期区分による研究遂行は便宜上妥当なものだと考える。以下、具体的に項目を挙げる。

(1) 初期著作(1809-1830)

① 初期著作前期(1809-1820)

この時期は、はナポレオン帝政期と王政復古期に相当する。この時期のヴィオレール＝デュックの著作のジャンルを観察すると、さらに前期と後期に区分することができ、前期は詩作品が中心であり、後期は過去の作品の校訂という文学研究者としての活動が中心である。

風刺作家ルキアノスの着想に倣った処女作 *Nouvel art poétique* (『新詩法』) をはじめとし、これに続く諸詩篇は、メニッポス流のギリシャ風刺詩の伝統の上に作成されたものである。申請者は、これら諸詩篇の中でもとりわけ 1820年の『計木詩法』(*La Métroxylotechnie*) が特異な存在であることに注目し、この作品に至るまでの諸詩篇の分析を通して、ロマン主義的な思潮が台頭しようとしているこの時期に、著者がどのような意図を持ってこれらの著作を公表していったのか、フランス詩における風刺詩の伝統と激変する時代背景との関連において考察する。

② 初期著作後期(1821-1830)

この時期にヴィオレール＝デュックは、1825年の *Notice nécrologique sur P.-L. Courier*. (『P. L. クリエ追悼文』) を除いて、ボワロー、レニエの作品の校訂本、およびフランス詩法に関する著作を出版しており、書誌学者、文学史家として活動している。彼は、自ら風刺詩を作成するのみならず、17世紀以降のフランスにおける風刺詩を書誌学的に詳細に研究していた。とりわけ、1822年のレニエの校訂版には、序文に代る「フランスにおける風刺詩の歴史」という小論文を付与している。また、1929年には風刺詩を含むフランス詩の歴史を概観した著作を出版するに至っている。ここでなお興味深いのは、軍人だった兄の親友、激烈な作風で知

られる作家 P. L. クリエの追悼文を書いていることである。息子の高名な建築家、ウジェーヌ＝エマニュエルが後年回想しているところによれば、P. L. クリエはヴィオレ＝ル＝デュックの館をよく訪れ、快く迎え入れられていたようである。お互い気質がよく似ていたこともあり、この両者の交流はかなり親密なものであったと考えられる。P. L. クリエはヘレニストでもあった。両者をつなぐキーワードに「古代ギリシャ」を挙げても不当ではないであろう。奇しくもネルヴァルが後年『アルティスト』に連載した「*La Bohème Galante*」の中で「ロンサールはラテン的というよりむしろギリシャ的だ」と呟くように、ロンサールを中心としたプレイアド派の詩が古代ギリシャを源泉としていたことはここで指摘しておいても良い。サント＝ブーヴによってロマン主義的なフィルターのかかったロンサール紹介（1828年にサント＝ブーヴは小論『16世紀フランス詩及び演劇の歴史的批評的展望』と同時に『ロンサール選集』を出版している）と同時期あるいはそれ以前に、ヴィオレ＝ル＝デュックはその気質から正当な意味でプレイアド派の詩を理解したと考えられるが、その点に関して書誌的に考察する。

(2)中期著作(1831-1840)

7月王制前期に相当するこの時期、ヴィオレ＝ル＝デュックは官吏としてルイ＝フィリップの宮廷に勤務していた。

フランス詩の歴史についての研究を経たあと、彼は再び風刺詩を発表する。1837年の『サント＝ブーヴへの書簡』はとりもなおさず、サント＝ブーヴ宛の書簡詩の体裁をとっている。この詩の持つ意味を書誌学的に検討し、この時期におけるサント＝ブーヴとの関係について考察する。

(3)後期著作(1841-1857)

7月王制後期および第2共和制成立（1848）以降のヴィオレ＝ル＝デュックの活動、すなわち晩年の活動を明らかにする。

1843年の『蔵書目録』は謙虚な表題にもかかわらず、編年体の書誌によって詩の歴史を記述しようとした独創的なスタイルの著作で、自らの活動を総括した著作である。

また、彼は、1853年に彼の生涯最後の文学作品であり唯一の小説、*Six mois de la vie d'un jeune homme*(1797)（『ある青年の人生の6ヶ月（1797年）』）を発表し、ここでロマン派的な思考に魅力を感じながらも次第に距離をとってゆく青年の姿を描いている。この小説と彼の生涯の著作との関連を解明する。

4. 研究成果

上記の研究方法で述べた、公刊時期による区分(1),(2),(3)に従って、本研究によって得られた成果を以下に簡潔に記載する。

(1)初期著作前期(1809-1830)について

後に『韻文蔵書目録』1（1843年）で語られるように、ヴィオレ＝ル＝デュックはフランスの詩について総合的な知見の確立を目指していた。

彼が取った最初の方法は詩の創作（『新詩法』(*Nouvel art poétique*) 1809年）であった。『新詩法』という表題（明らかに古典詩人ボワローの風刺詩『詩法』を捩ったものである）から容易に推察されるように、彼が取った表現方法は「風刺」というきわめて古典的な方法である。ロマン主義台頭の時期にあつて、あえてこのような方法をとった背景には、まさに彼の風刺的精神があると考えられる。引き続き彼は『ローマとチブル』、『アポロンの帰還』、『ナポレオン弾劾詩』、『栄達の技法』、『計木詩法』と風刺詩を発表する。また、詩を創作する一方、官吏という職務を果たしながらも、自らの文学史観を形成すべく研究を続けていたように思われる。当時の文学史の大著、ラルプ『古代近代文学講義』に見られるように、ギリシャ＝ローマの文芸的権威がフランス古典期に継承され、それが18世紀の知的啓蒙の文芸へと継承・発展を遂げたとする文学史観に対して彼は反発を覚えていたに違いない。詩作品を連続して発表した後、彼は詩作から方向を転じ、まずフランス風刺詩人の系譜であるボワロー、レニエの校訂版を出版した後、『フランス詩概要』というフランス詩史の研究成果を公表する。彼はフランス古典期を評価するものの過大評価はせず、中世から16世紀ルネサンスを経て古典期に至る流れを叙述することで、ボワロー以降無視されて来た古典期以前の文芸を再評価する。これは、サント＝ブーヴを中心としたロマン主義グループが古典主義者達への反発からフランス古典主義の影に隠れた16世紀の文芸に価値を見出した動きとは別の再評価なのである。

(2)中期著作(1831-1840)について

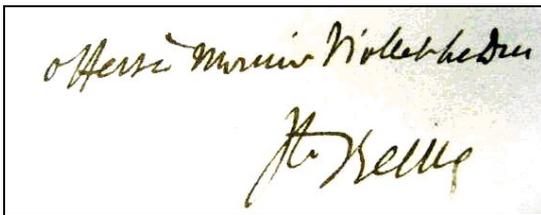
1837年の『サント＝ブーヴへの書簡』を中心にサント＝ブーヴとヴィオレ＝ル＝デュックとの関係を解明した。

サント＝ブーヴがジャーナリズムの世界に登場するのは1824年であるが、この頃、彼はヴィオレ＝ル＝デュックが催すサロンに出入りし、色々とヴィオレ＝ル＝デュックの世話になっていた。後年、サント＝ブーヴ

が、ジャーナリストとして活躍するようになった後は、ヴィオレール＝デュックに対する感謝の態度が見られない、とする G. Charlier のような考え方もあるが、実際にはそうではない。確かに、直接サント＝ブーヴが公表したものであるもののヴィオレール＝デュックの扱いはそれほど多くはなく、また冷淡と取られるような扱いであるとさえ考えられても止むを得ない。

しかし、ヴィオレール＝デュックがきわめて小部数で刊行した、『サント＝ブーヴへの書簡』(Épître à M. Sainte-Beuve, 1837. [Signé: Viollet le Duc.], Paris: impr. de Rignoux, (1837). In-8°, 8p.) の刊行時期を確定したうえで(実際、複数の書誌で刊行時期の記述に混乱が見られる)、この書簡形式の詩の内容および、アンリ＝パタンが1844年に「ジュルナル・デ・サヴァン」に掲載したヴィオレール＝デュックとサント＝ブーヴに言及した記事をあわせて検討することにより、彼らの交際は現実には続いており、「サント＝ブーヴがヴィオレール＝デュックに対して感謝の意を表していない」とすることは妥当ではない、ということを示した。

また、上記の結論を傍証するものとして、ヴィオレール＝デュックへの自筆献辞が入ったサント＝ブーヴの著書『ラ・ブリユイールとラ・ロシュフーコー』(La Bruyère et la Rochefoucauld, ..., Paris, Imprimerie de H. Fournier et Cie, 1842)を発見した(この版については現在報告者が所有しており、J. Bonnerot, *Bibliographie de l'œuvre de Sainte-Beuve*, I, p. 257-p. 258 間に挿入されている同書のタイトルページの図版に見られる Bibliothothèque de l'Institut 宛のサント＝ブーヴの自筆献辞の署名の筆跡とは同じものである)。



(3)後期著作(1841-1857)について

この時期に公刊された下記の文献を調査対象として、フランス国立図書館の蔵書を綿密に検討した。

1. *Catalogue des livres composant la bibliothèque poétique*, 1843. (書誌)
2. *Bibliothèque de M. Viollet le Duc. 1re partie.*, 1849. (蔵書売り立て目録)
3. *Bibliothèque de M. Viollet le Duc. 2e partie.*, 1853 (蔵書売り立て目録)

第1の成果は、上記2の1849年の蔵書売り立て目録 No.362(p.32)に記載されている *Judith et David, tragedies. Par monsieur L*** avocat* は、フランス国立図書館の蔵書目録ではヴィオレール＝デュックの共著者あるいは共編者として記載されているが、アルスナル分館所蔵本 (ARS GD-20977) を検討した所、ヴィオレール＝デュックの書票があるのみで編集に関する関与は認められないことを確認したことである。

第2の成果は、文献調査に伴ってこれまでの書誌には記載されていなかった、ヴィオレール＝デュックの作品を数点発見したことである(1819年から1820年にかけて発刊された短命の文芸雑誌『リセ・フランセ』(*Lycée Français*)に収録されている)。

これらは、これまでヴィオレール＝デュックに関する文献では全く言及されていなかった作品であり、小規模ではあるが重要な成果であると考えている。

上記の発見に伴い、ヴィオレール＝デュックの著作活動、特に前期著作活動についての研究の再構築を迫られ、文学史上ではこれまで注目されていなかった雑誌『リセ・フランセ』(*Lycée Français*)について文芸上の位置を現在考察中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 岩根 久, 「サント＝ブーヴとヴィオレール＝デュック」, 柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編『テキストの生理学』, 朝日出版社, 2008年, pp.447-459.
- ② 岩根 久, 「E.-L.-N. ヴィオレール＝デュックの『計木詩法』(La Métroxylotechnie)について」, 金崎春幸他編『シュンポシオン—高岡幸一教授退職記念論集—』, 朝日出版社, 2006年, pp.245-254.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩根 久 (IWANE HISASHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号: 50176559

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし